

1990年度日本気象学会奨励金受領者選定理由書

受領者：横田寛伸（大阪管区気象台）

研究項目：メソスケール気象現象の研究

選定理由：横田会員は、昭和63年に大阪管区気象台に配属され、予報課で勤務している。この間、多忙な業務のかたわら、同管区内に現れた種々のメソ気象現象に関する調査研究を精力的に行っている。

昭和63年には、レーダー・地上・高層資料を用いて、通説とは異なった構造を持つ寒冷前線に伴う、幅の狭い降雨帯の微細構造・移動・消長について調べた。さらに、この寒冷前線の構造・振舞いを説明する新しい概念モデルを提唱した。この研究成果は大阪管区気象研究会誌と大阪管区気象台の「技術情報」に報告され、「研究時報」にも投稿中である。

平成元年から2年にかけては、瀬戸大橋上の6つの観測点の風の連続記録を用いて、台風に伴う暴風と海陸風の事例について海上風の特性を調べている。この調査研究は、それまで観測データが少なかった瀬戸内海を横断する形で新しい観測定点ができたことを利用したものである。四国側と山陽側で海風開始時刻が異なることや両側の海風領域の境目が南北移動していることなど、興味深い結果が得られている。この研究成果は今年の気象学会春季大会で発表され、「天気」8月号に掲載された。今後さらにデータの収集・解析を積み重ねていくことにより、瀬戸内海の実態の把握と機構解明に大きく貢献するものと期待される。

同会員は現在、きめ細かな観測データに基づくメソ天気現象の構造把握に努めるべく、調査研究に精力的に取り組んでいる。加えて、数値シミュレーションにも強い関心を持っており、この方面からの活躍も期待される。

以上のようなメソ気象現象の研究は、今後の気象学および気象業務の発展に大きく寄与するものと考え、本学会はここに奨励金を贈るものである。

受領者：松村 哲（徳島地方気象台）

研究項目：高知・徳島地方の局地気象の研究

選定理由：松村会員は1968年に高松地方気象台に採用された後、徳島・高知両県内の気象官署に勤務し、現在は徳島地方気象台の予報官として第一線の予報業務を担当している。この間、長年にわたり多忙な現業勤務のかたわら、局地気象現象の調査・研究に努めている。

1979年から1983年の高知空港出張所勤務時代には、職場の同僚と作った調査グループで、「高知空港における海陸風とその予測」についての調査・研究を行い、海風の進入の実態と形成過程について解明し、さらに航空機の離着陸時に問題となる低層ウィンドシアの研究に発展させた。

1984年からは高知、徳島地方気象台勤務となり主に局地豪雨の調査・研究に取り組んだ。1984年の「縁辺流による高知の雨」では、太平洋高気圧の位置・発達と縁辺流進入の関係及び雨雲の発生・移動の特徴を示した。1989年の「日和佐を中心とした局地豪雨」は、メソスケールの擾乱の中で発生した局地豪雨の地域特性を、雨雲のライフサイクルと移動などの調査により解明することを試みた。

また同会員は、局地豪雨の事例解析を通じて数値予報資料や降水短時間予測資料の検証にも努め、注・警報の踏み切り（注・警報の対象となる現象を何時間前に予測し、いつ注・警報を発表するかという判断）に利用する際のこれら資料の問題点などを追求し、予報作業に活用した。

同会員は、今後更に局地豪雨などメソ気象現象の事例解析を積み重ね、地域特性等との関係を明らかにして、地域独自のメソ天気系モデルの開発に取り組む計画である。

以上のように個人またはグループの中心として、終始熱心に調査・研究に取り組んで来たことは、地域に密着した局地気象の研究及び気象業務の発展に大きく寄与するものであり、本学会はここに奨励金を贈るものである。